

いまだ仏ほとけの像みかたを作畢つくりをはらずして棄すてたる木異靈あやしき表しるしを

あらは ことのもと

示す縁 第二十六

一八 禅師ぜんじ広達くわうだちは、俗姓ぞくしやう下毛野朝臣しもつけのあそみ、上かみ総つ国武射郡ふさのくにむざのこほりの人なり一あるは畔蒜郡あひるのこほりの人と云いふ

中卷 第二十五—二十六縁

第二十六縁 あやしき表(しる)の説話。今昔物語集・十二ノ十一、扶桑略記・聖武天皇条に書承。

八 統紀・宝龜三年(七三)三月六日条に、持戒、看病に名を得た「十禅師」のひとり「広達」がみえ、三国仏法伝通縁起・中に、「元興寺法相宗」として「広達大法師」がみえる(攷証)。一九 千葉県山武郡あたり。二〇 千葉県君津市あたり。

なり。聖武天皇の代に、広達吉野の金峯に入り、樹の下を經行りて仏の道を求む。時に吉野郡桃花里に椅有り。椅は、本は梨を伐りて引き置きて、歳余を歴たり。同じき処に河有り。名けて秋河と曰ふ。彼の引き置ける梨を是の河に度して、人と畜と俱踐みて度りて往き還る。広達縁有りて里に出でて彼の椅を度りて往く。椅の下に音有りて曰はく「嗚呼、痛く踰むことなかれ」といふ。禪師聞き、怪びて見れば人無し。良久にありて徘徊り、忍びて過ぐることを得ず、椅に就きて起し看れば、いまだ仏を造り了らずして棄てたる木なり。禪師大に恐り、淨き処に引置きて、哀び哭き敬ひ礼み、誓願を發して言さく「因縁有るが故に遇ひたてまつる。我れかならず造り奉らむ」とまうす。縁有る処に請へ、人を勧へ物を集めて、阿弥陀仏弥勒仏觀音菩薩の等き像を雕造ること既に訖る。今、吉野郡越部村の岡堂に居置くなり。木は是れ心無し。何にぞ声を出さむ。ただし聖の靈の示るるなり。更に疑ふべからざるなり。

一未詳。奈良県吉野郡下市町あたりか。

二その椅が元來どのようなものであつたかというところ。

「椅本伐梨以下」而度往還までは、上文の「有椅」の補足説明。

三木彫仏像の材料は飛鳥時代にはクスノキであつたが、奈良時代には木彫仏像が少なく、金銅仏、乾漆、塑造、などがおこなわれ、奈良時代末期から平安時代初期にはヒノキ、サクラ、セリダン、クルミ、カエデ、ケヤキ、ハリギリ、カヤ、が用いられ、平安時代中期以後にはヒノキが用いられた(小原二郎)。ナシを用いた木彫仏像は、本説話以外に所伝をみないが、この時代の木彫仏像の材料の多様さがうかがえる。

四吉野川の支流。五人畜に踏まれない場所。

六知識を結んで。上巻三十五縁。

七この中に弥勒像が含まれていることに關しては、中巻二十三縁、下巻十七縁、二十八縁。

ハ奈良県吉野郡大淀町大字越部。

九越部に存する寺跡がその地とされる。二〇仏。

第二十七縁 上巻三縁を承ける記述を含み、

中巻四縁にもかかわる。今昔物語集・二十三ノ十八に書承。

二未詳。本説話以外に所伝をみない。二三愛

知県中島郡、一宮市、尾西市、稻沢市あたり。

三名古屋市中区。上巻三縁、中巻四縁と同じ地。地名表記が異なる。依拠資料の用字の反映

か。一四上巻三縁。この別注によつて本説話